

---

# 若いタクシー運転手の苦勞

うっちゃん

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

若いタクシー運転手の苦勞

### 【コード】

N0950G

### 【作者名】

うっちゃん

### 【あらすじ】

まだ17歳でタクシーの運転手になった少年のほぼ完全コメディです

どうも、最近タクシーの運転手になった健太です。

周りからよく老け顔っていわれますが、れっきとした17歳です。学校は卒業しています、いわゆる飛び級ってやつで。でも暇だったのでまた日本で高校生やり直してます。

決して高校受験に失敗したからこの歳で運転手してるわけじゃないのであしからず。

運転手として働いている理由は作者が考えるの面・・・ゴホン、バイトです、バイトとって思っていてください。

それでは、このピッカピカに洗車したスーパーマイカー三郎くん3号で働きますか!!!

あ、別に三台目ってわけではありません。

「・・・人いない」

タクシーを求めてくれる人を探すために空港まで行った健太です。

いやあ、みんな運転手の俺の顔みて帰っていきますねえ、空港に何か忘れものでもしたんでしょうか？

ガチャ。

どうやらどっかから旅行に来ましたって感じの20台前半くらいの女性が乗ってきましたねえ。友達いないんでしょうか？

「えっと、このホテルまで・・・げ」

「くら、ちよつとまちなさい」

いきなり人の顔を見るなり嫌そうな顔して出て行こうとする人がいますよ！失礼にもほどがあります。

「あんた大丈夫？いい歳して学ランなんか着て何のコスプレよ」

学ラン着てるってことで学生だと思わないのでしょうか？まあ、学ランの運転手って時点でおかしいですが。

「コスプレではないので安心してください、服を今ちよつどクリーニングに出しているの、着替えずに来ただけですから」

クリーニングは本当です。

「え、それってもしかしてあなた学生？・・・ってそんなわけないか、どう見ても20台後半じゃない、ってことはやっぱりコスプレじゃない」

いやにコスプレに突っかかってきますねえ、しかも20台後半って

なのですが、僕のピュアなハートがとても傷つきました、現在進行形で。

「もういいじゃないですか、それより早く目的地を言ってください、後がつまっていますから」

さっきから同業者の方がクラクションをブーブー鳴らしています。うるさいですねえ、ちよっとくらい待てないものでしょうか。

「はあ、もういいわ、それじゃこのホテルに行って」

そういつてさされた目的地は近くもなく、遠くもないとても微妙な距離です。個人的にはもっと遠くに行ってくれるとありがたいのですが。

「それじゃ、出発します」

スーパーマイカー三郎くん3号を発進させます、もちろんメーターのスイッチを入れることを忘れずに。後ろから舌打ちが聞こえたよ  
うな気がしますが無視です。

「あ、ちよっと途中でコンビニよってくれない?」

さっきまで電話で何かギャアギャア騒いでいた彼女が電話を切って

僕に言った第一声がこれです。

「いいですけどなぜです？ 僕的に早く仕事を終わらせたいので断ってもよろしいですか？」

一応断っておきます

「はあ！ 何いつてるのよ！ 客がいつてるのよ！ 素直にコンビニに行きなさいよ！」

すぐギャアギャア騒ぐ人ですね、うつとおしい。

「うつとおしいってなによ！ あなたが全部わるいんじゃない！」

おや、声に出していたみたいですね、これは失敬。

「ほら、ギャアギャア騒いでいるうちにコンビニにつきましたよ、さっさと行って何か買ってきてください」

すると彼女はコンビニに向かっていたことに気づいて赤面しました。

「うつ、うるさいわね、行ってくるわよ！」

そういつて彼女はドアを乱暴に開け閉めしました。まったく、スーパーマイカー三郎くん3号に傷がついたらどうするんですか、修理代払ってくれるんでしょうか？

そんな感じでブツブツ文句を言って、メーターの数値をこっそり上げていると彼女が戻ってきました。

何を買ったのか聞かないけど多分生活用品でしょう、ハブラシとか。

「それでは、目的のホテルにいきますよ、パシリさん」

彼女はまたわかりやすく顔を真っ赤にして怒鳴ってきました。窓閉めたからよかつたけどあいていたらどうするつもりだったんですか、近所迷惑でしょ。

「ねえ、そういえばあなたなんでそんな格好してるのよ」

わああ、今さらその話題を再び振ってきますか。

「僕が高校生だからですよ」

そついうと彼女はとてもあきれたような顔をしました。

「はあ、何馬鹿なこといつてんのよ、その顔で高校生？ぶざけんじやないわよ、真面目に答えなさい」

ちよつとイラついたので生徒証明書を見せます。

すると彼女はとてもびっくりした顔で

「え、うつそ、あなた本当に高校生！？ぜんぜん見えない、もしかしてこれ偽証？」

とか言ってきました。これはまたメーターの数値を上げないといけないですねえ。

「ふん、まあいいわ、高校生でもちゃんとホテルまで送ってくれば」

普通高校生なのに運転してるのとかそんなことを聞いてきませんか？  
やっぱり彼女はおかしい・・・ああ、ちゃんと免許持ってますよ、  
この顔で得したのは初めてでしたよ。

「ねえ健太？」

なぜ私の名前を・・・ってさっき証明書を見せたときですか。

「もうすぐつきそう？なんかさつきからぜんぜん進んでないけど  
うるさいですね、今赤信号なんです、だからこの信号機嫌いなんですよ、  
赤が長いし青になってもすぐ赤にわかるし。」

「そら、あそこですよ、あの突き当たりを右に回れば見えますよ。」

そういうと彼女は黙りました、なんか暇ですねえ、彼女の目の前でメーターの数値を上げてみましょう。

「・・・っ！ちょっと！何してんのよ！」

「あまりにも暇だったもので」

彼女が抗議してきます。

「おかしいでしょ！何暇だからって値段上げてるのよ！」

「ノリ？」

「ぶつとばすわよ？」

「ごめんなさい」

僕はすぐ上げたメーターの数値を元に戻しました。前あげたメーターの数値は戻してないけど。

「ほら、あそこですよ、あの赤い建物」

突き当たりを右に曲がると真っ赤なホテルが見えてきました、あれでも世界最高級のホテルらしいです。

「そう、やっとついたのね、まったく疲れたわ」

む、失礼な、それではまるで僕と一緒にいると疲れるって言うてる様な感じじゃなですか。

「よつなじゃなくて疲れるのよ」

また声に出したみたいです、これまた失敬。

「それじゃ、お金はつて114873円!?ふぜけんじゃわないわよ!」

ん?ああ、これですか。

「このメーター右の11が壊れてるので正確には4873円ですね、このメーターは1円刻みで判定しますから」

「そ、そう、それじゃはらう、セコイのね」

ふ、セコクてなにが悪いのですか。

「おーい、桃香、おそいわよー」

そうやら彼女の友達が先に来てたみたいです、一人だけ違う時間に予約したんでしょうか?

「あ、今行くわよ、それじゃね」

そういつて彼女は友達の元行きました。

それでは、都内のほうにでも行きますかな。



(後書き)

勢いで作ってしまいました。

こんな駄作ですが、できれば評価お願いします^^

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n0950g/>

---

若いタクシー運転手の苦勞

2011年1月16日03時50分発行